

加納草子

平成 25 年文月号（第 1 号）

歴代加納藩主

三代で断絶した奥平氏 33 年間

奥平氏は、上野国（群馬県）甘楽郡奥平郷の出身で、三河国（愛知県）設楽郡に定着した小豪族である。戦国時代を、今川氏、松平（徳川）氏、武田氏という大勢力にそのときの状況に応じながら、それぞれ属し生き延びた。

武田信玄の死後、奥平貞昌は父とともに武田氏から再び徳川氏に属したが、このとき、妻と弟を武田氏によって処刑されている。

天正 3（1575）年、貞昌は長篠の戦いのとき、長篠城に籠城、大功をたて織田信長から諱を与えられ貞昌を「信昌」に改めた。翌年、新城に移り信長のとりなしで徳川家康の長女、亀姫を妻にしている。家康の関東入部のとき、上野國小幡で 3 万石の大名になり、関ヶ原の戦いの直後、初代京都所司代に任命され、慶長 6（1601）年、加納 10 万石の大名となった。

信昌は、加納入封とともに、城下の整備や領地の治山治水事業を行い、元和元（1625）年、61 歳で死去、盛徳寺に葬られた。

信昌の三男、忠政は菅沼氏の養子となり上野国吉井 3 万石の藩主となっていたが、加納に移ってきた。養子を戻すにあたっては亀姫の意思があったといわれている。しかし、忠政は菅沼姓のままで、加納は奥平氏から菅沼氏に代わったという見方もある。加納奥平氏は、忠政の子、忠隆のとき断絶した。寛永 9（1633）年であった。

一方、奥平氏本家は、信昌の長男、家貞が継ぎ、下野国（栃木県）宇都宮 10 万石のち豊前国（大分県）中津に移封されている。また信昌の四男、忠明は松平姓を与えられ姫路 18 万石のち武蔵国（埼玉県）忍 10 万石となっている。



数年で転封 大久保氏 8 年間

三代で断絶した加納奥平氏に代わって加納藩主となったのは、大久保長安事件で改易となった大久保忠隣の子孫にあたる大久保忠職で、騎西（埼玉県）2 万石から加納 5 万石として入封した。大久保忠職の母は奥平信貞の娘千姫、妻は松平（奥平）忠明の娘梅姫と、奥平氏と縁の深い関係であったが、寛永 16 年、7 万石に加増され明石に転封となった。

松姫のおかげ 戸田氏 73 年間

大久保氏と入れ替わるように明石より入封となったのが戸田氏である。戸田氏は家康の妹松姫を嫁にした家系で、徳川氏より松平氏の姓と葵の紋を与えられた。

寛永 11 年（1634）、明石藩主戸田康直が死去したとき、跡継ぎが無く断絶のような状態であったが、兄の子光重に相続が許された改易を逃れた。これは松姫による将軍家との姻戚関係のおかげだと、加納 7 万石で入封した大久保光重は、領地である桑山（本巢市）に知勝院を建立し、松姫を祀っている。

寛文 8（1668）年、光重の嫡男光永が相続するとき、2 人の弟、光正に文殊（本巢市）、光賢に北方（北方町）とそれぞれ 5000 石を与え旗本とした。正徳元（1711）年、山城（京都府）淀に転封した。

幽閉された殿様 安藤氏 49 年間

戸田氏に代わって、戸田光重の娘を母にもつ安藤信友が、6 万 5000 石で入封した。信友は寺社奉行、大坂城代、さらに 8 代将軍吉宗のもとで 10 年間、老中を務めた。

信友の家督をついた信尹（のぶただ）は、「雪の日やあれも人の子樽ひろい」の作者で知られているが、飲酒遊興の毎日だったという。このころ領内では御用金の賦課と先納年貢に苦しんだ農民の強訴があったが、これは藩主信尹の不行跡だと、家老や家臣によって信尹を 1 年余り幽閉してしまった。ところが家老も同じく飲酒遊興をしたため、家臣たちが幕府に訴え、宝暦 5（1755）年、この家老は死罪、これにかかわった家臣たち 20 名あまりは遠島などの処分となった。訴えた家臣も死罪となり 15 歳の子は八丈島に遠島となった。

藩主信尹は隠居処分となり、1 万 5000 石を没収され、翌宝暦 6 年、平（福島県いわき市）へ転封となった。平へ転封するとき、安藤氏の家臣たちは 4 ヶ月あまり加納宿の 50 軒の宿に留まっており、この代金は 350 両に及んだといい、平藩安藤氏へ請求したが 3 年たっても完全な返済は済んでいなかったという。農民への先納年貢の代金も同様だったといわれている。

花開く和傘 永井氏 114 年間

安藤氏のあとには、3 万 2000 石で永井氏の入封となった。永井氏の時代は飢餓、洪水などで年貢が次第に減少し、また幕府の要職就任費用などもあり藩の財政基盤を弱くなっていた。さらには皇女和宮の送迎に関わる 4500 両の出費も拍車をかけていた。

このような状況のなか永井氏は、農民に対して倹約を、家臣に対しては禄米の一部を藩へ貸すという形で減禄させた。ある家臣の例では 40%もカットされている。このような藩政改革を行っても効果は少なく、結局、豪商や豪農からのさまざまな資金援助で財政が成り立っていた。

加納の和傘は、永井氏が入封したころには、すでに盛んとなっていたが、藩の保護、豊富な労働力、近くからの原材料の入手、交通の便の良さなどの条件が重なり、のち年 50 万本も生産する加納を代表する産業となっていた。

最後の加納藩主、永井尚服（なおこと）は明治政府に帰順、明治 5（1872）年、東京へ移住した。

－（『散策ガイド岐阜市の中山道 加納宿・加納城下』松尾一）より－

加納草子（かのうぞうし） 平成 25 年文月号（第 1 号） 発行日 平成 25 年 7 月
発行 加納まちづくり会 <http://kanou-jyo.net/> 発行者 水野 律子
事務局 500-8415 岐阜市加納中広江町 68 横山ビル 松尾一 ☎ 058-274-9479